的にも諍つたことは遺憾事であつた。

あれは公平に見て津が退く時機を逸した惜恨を感じさせた。幸福そのものゝ如く云はれてゐた津大夫も、愛息津の子大夫改め濱大夫改名興行出演の直前に倒れて遂に永劫の眠りについたのは、何としても故人最大の不幸である。喜悲兩極端をその生命の最後的段階に描きつゝ從容として永眠した津大夫は身を以つて人生の舞臺に、死の淨瑠璃を演出したとも云ひ得られる。

生前故人が得意の語り物とした日向島、逆艪、合邦、吃又、沼津に就ては他日粗記したい。

○

津大夫の死は決定的に古靱の存在を榮三、文五郎と共に國寶化させて來た。

巨木津大夫を失つた空洞を文樂當事者が如何にして埋めるか、殘念乍ら私は希望感を抱き得ない研鑽深緻の人古靱大夫を新總帥として文樂は藝術的に破局の前夜に直面しつゝある。

宛ら嘗つて圓菊左を失つた明治末期の歌舞伎劇壇の如く。しかし幸に古靱には圓菊に比肩する傑質がある。

文樂經營者たる會社松竹は古靱をして如何に文樂を統率させるかに心を碎くよりも、專心古靱を名人圈内に突入させるが最善の良道である。

純藝術的な研鑽の餘裕を古靱に與へることを忘却してはならない。挿言すれば駒津の死去によつて壞滅した世話物陣の空隙を强いて古靱を用ひて興行政策的にふさぐ愚を採らず、到らずと云へど中堅を起用して古靱は飽く迄其の本領を堀り下げ眞價を存分顯現出來る良心的な語り物に打ち込ます可きである。

不吉なことを云ふやうだが、古靱なき後の文樂を思ふと慄然たらざるを得ない。

恐らく義大夫淨瑠璃の最後の名人となるであらう古靱大夫に對して文樂當事者は周到な考察と敬虔な果斷を持つて「昭和文樂史」に偉大な記念塔を打ち建てる最高演出へ良心的な眞闘を期待したい。と同時に大隅、織大夫等の大成へ拍車する展道を眞劍に開拓すべきである。

（十六、五、十日）

土佐と伊達

本誌同人　武智鐵二

駒大夫の死を聞いて一兩日にして六代目土佐大夫の訃に接した。彼の死が文樂座の消長や、義大夫界の盛衰に、直

接的な影響がないにしても、一抹の感慨なきを得ない。

彼は私が批評生活を始める以前に第一線を退いた。これは私として痛恨事である。彼の淨瑠璃は、古靱の如き高く正しき完成度を持してゐる底のものではないが、津大夫の如く無表現無根據なものでもなかつた。通俗的な面白さが義大夫正道を破つてゐる點もあれば、そのまゝ藝術的表現にまで高まつてゐる場合もあつて、殊に引退前一二年は彼なりにかなりに深い淨瑠璃を語つてゐた。この特異な淨瑠璃と四つに組んで批評することを得たならば、私の批評態度に必ずや新しい面を切り開き得たらうにと、今以つて悔まれてならない。唯、彼の引退後の淨瑠璃（殊に昨年放送した「長局」「櫻時雨」の如きは慘憺耳を掩はしむるものがあつた。誠に强弩の末の感であつた。

駒大夫の死は、彼が文樂座の現役であつたゞけに、直接的な影響を義大夫界に與へる。大隅大夫や文字大夫が彼の地位を繼いで、重要な一段を受持つやうになることだけを想像してみても、大打擊である。土佐の死は、彼の引退がその藝術的な死を意味するのである以上單なる生理的一現象としてより以外の感銘を覺えない。それよりも私は彼の死にまつはる挿話中の人物として登場した伊達大夫の上に深い興味を感じた。

四月興行に於ける駒大夫の役場「新口村」は伊達大夫によつて受持たれ、伊達は土佐大夫にその稽古をつけて貰つてゐた——と各新聞は報じてゐる。ところで、朝日新聞の記事に依れば、土佐の訃報に接して、伊達は兩眼から熱い涙を幾筋も流して、新口村を語つた、といふのだ。然し私は、この涙を、劇中の人物と同化して、新口村の悲劇的分子に着眼して、語つたゝめに流した涙であるとは、伊達の從來の成績を參酌して見て、考へることが出來ない。この涙は、新口村の悲劇とは別箇に、土佐の死、師匠の死といふ衝動的突發事から受けた悲嘆に發するものであるか、せい〳〵、師匠が病を押し、死の前日まで教へてくれたにも拘らず、自分の語る新口村の餘りにも不完全不充分な語り口に對する慚愧の涙であつたのであらう。（然し、これだけの自己批判が出來れば伊達大夫としては上等過ぎる）現に朝日紙の記事は伊達の成績を斯く物語つてゐる。彼が一日に土佐の稽古を受けた時、土佐にまる半日の稽古の末「まだ〳〵あきまへん」と言ひ、もう一日稽古に來るやうに言ひつけ、その二日目の稽古を伊達は受けず、そこ〳〵にして辭去してゐるつまり「まだ〳〵あきまへん」淨瑠璃を伊達は語つてゐるのである。

伊達大夫は、土佐が自分の前名を讓るほどあつて、現

下大夫貧困の文樂座に在つて、いさゝか素質に惠まれた部類に屬する人である。然し素質はあくまで素質であつて、それを磨き上げずしては完成品とはなり得ない。材木をいくら積上げて見ても、それを削り、組立てなければ家にはならない。伊達大夫は放り出された材木であるに過ぎない。それは家になり得る。然しそれ自體決して家ではない。

伊達大夫は義大夫節を知らない。義大夫を知り、學び且演練するの途を彼は今後心掛くべきである。それが幾百行の慚愧の涙よりも優れた亡師への回向となるであらう。（一六、四、三）

駒大夫の死

本誌同人　武智鐵二

七代目駒大夫が死んださうである。私は元來彼の藝を好まなかつた。それは彼が文樂現下唯一の業師の手だれであることは認める。然し、その業を以てしてさへ猶蔽ひ難き非力と語り口につき纏ふ下品さと、業から來る一種の小手先藝——藝術的大燃燒力の不足と要するにあの端唄淨瑠璃的なものに世紀末的なものを感じて、どうしても好きになれなかつた。彼の得意の世話物にあつても下卑な情話調のみをしか感得しえなかつた。ところで、私が彼を見直したのは昨年東京で演ぜられた「封印切」からであつた。彼はそこで始めて大藝術家としての風丰を現した。そこには生きた人間の息と肉とがあつた。彼の非力は依然淨瑠璃を片輪にしてゐたが、それを踰越えて打つて來るエスプリが、そこにはあつた。エスプリ、それは藝術家を藝術家たらしむる最大最終の要素であり、藝術を人間に橋渡す棧であるのだ。義大夫を例に採つて、技巧的にも肉體的にも決して古靱大夫や駒大夫に劣らず否幾多の點で立優つてゐる織大夫をして、遂に此の兩者の前に膝を屈せしむるものは、このエスプリ、ユマニテの缺如なのである。越えて昨年末の文樂座に於ける「壺坂」に於て、駒大夫は神技を發揮した。彼は「テチン」を語つた。由來私は「壺坂」を好まない。然しその下らないお里澤市に人間の肉付けをし、無限の同情を寄せしめるには「テチン」を語るの他はない。日本傳統藝術の分解式、方程式式惡表現を捨て生きた全體的表現に依らんとした大團平の主張が、今日駒大夫によつて實現、まさに實現されたのだ。大隅大夫の昔は知らず、古靱土佐の壺坂をひつくるめて、駒大夫の「テチン」に及ぶもの